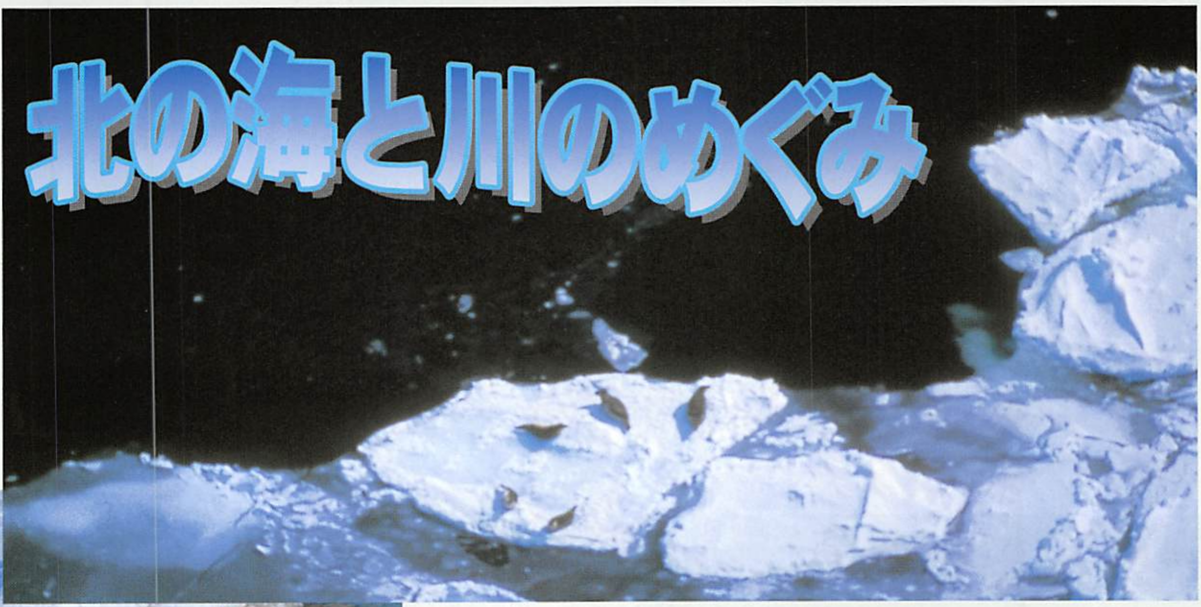
企画展

北の海と川のめぐみ



縄文文化から
アイヌ文化まで

2000.2.1（火）~3.20（月・祝）

写真提供　標津町サーモン科学館

開館時間　9：30～16：30
休 館 日　月曜日(ただし、3/20は開館)・2／17(木)
企画展の観覧料　無料

◇常設展示観覧料：一般250円[200]円、大学生80[50]円。
[]内は10人以上の団体料金。小・中・高校生は無料です。免除規定がありますので、詳しくはお問い合わせください。

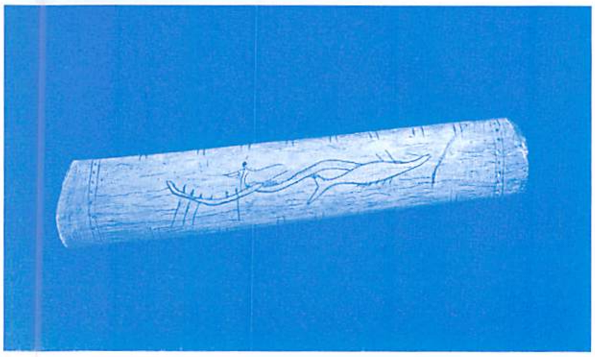
北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

〒093-0042　網走市字潮見309-1（天都山・道立オホーツク公園内）
Tel 0152-45-3888/Fax 0152-45-3889
e-mail:hoppohm@ohotuku26.or.jp
URL:http://www.ohotuku26.or.jp/organization/hoppohm/

北海道のオホーツク海沿岸は、海の幸、川の幸が豊富な地域です。縄文文化期からアイヌ文化期まで、海や川のめぐみを利用した人びとの生活について紹介します。

【海と川のめぐみ】

全長約500キロメートルに及ぶ北海道のオホーツク海沿岸は、1月から3月ころ、大陸のアムール川河口付近で形成される流氷群が流れ着く、最も南端にあたる場所である。そこには流氷が運んでくるプランクトンを求めて魚が集まり、その魚を求めてアザラシやトドなどの海獣が南下してくる。また、オホーツク海に注ぐ河川には、6月から11月ころ、数多くのサケ・マス類が遡上(そじょう)する。海岸地域や河川流域で豊富な食糧資源を安定して得られたおかげで、この地域では、長い間漁撈(ぎょろう)・採集・海獣猟が盛んであった。



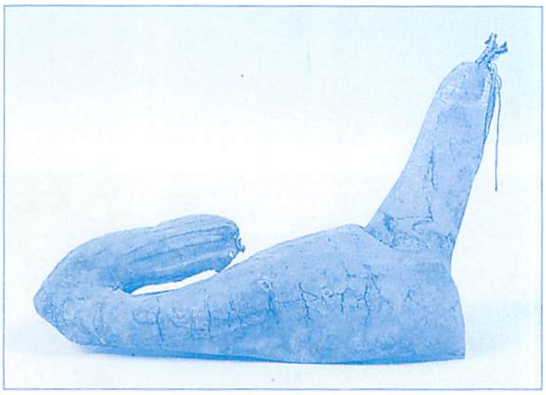
針入れ

【先史時代】

縄文文化期（紀元前7000年頃～紀元前後）、続縄文文化期（紀元1世紀頃～7世紀頃）、オホーツク文化期（5世紀頃～10世紀頃）、擦文(さつもん)文化期（8世紀頃～13世紀頃）など、北海道オホーツク海沿岸の先史時代の遺跡からは、シジミやサケ・マス類、アザラシ類などの骨が多く出土する。当時の人びとは、動物の骨や石から作り出した釣り針や銛(もり)、そしておそらくは網などを使って貝類や魚類、海獣類などを獲っていた。

調理については、遺跡から出てきた土器に、煮こぼれ汁や煤(すす)が付着していることから、食料を石製のナイフで裂き、土器に入れて煮て食べる方法があったことがわかっている。

また、オホーツク文化期の遺跡からは、クジラやラッコ、魚などを彫刻した骨角器や舟の形をした木製品や土製品などが出土しており、縄文、続縄文、擦文の各文化期以上に、海との関係が深かったことを物語っている。



アザラシの胃（油の保存用）

【アイヌ文化期】

14世紀頃からはじまるアイヌ文化期には、それまで貴重品だった鉄が、生活道具としても多く利用されるようになる。釣り針や銛(もり)などの漁撈(ぎょろう)道具にも鉄が使用され、調理には土器のほかに鉄鍋も利用して煮物、汁物などを作っていた。

また、魚の内臓を取り出し、身の部分を乾燥させて保存食としたり、獲った海獣の内臓にアザラシの油を入れて保存し、調味料として使用するなどの加工、保存技術が認められる。

さらに、魚類や海獣類は食料として利用する以外にも、魚の皮を使って夏服や靴を作ったり、海獣の毛皮を使って防寒具を作ったりもした。

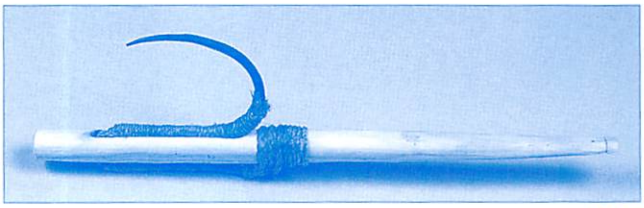
期間中のもよおし

◆講習会　鹿笛の歴史とはたらき
　2/12（土）13：30-16：00　当館講堂
　講　師　枡谷隆男氏（北海道札幌篠路高等学校教諭）

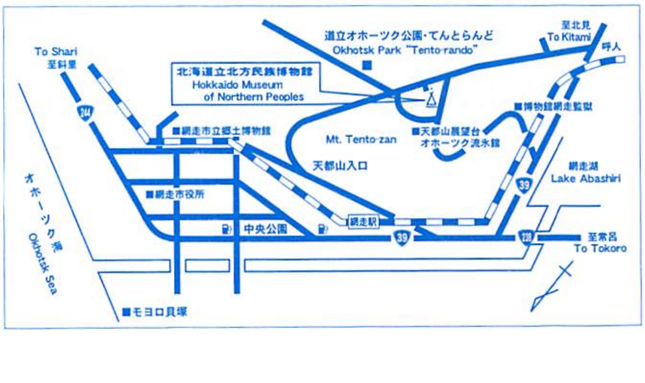
◆講　座　北の海と川のめぐみ
　2/19（土）13：30-16：00　当館講堂
　講　師　佐藤孝雄氏（常葉学園富士短期大学講師）
　　　　　村木美幸氏（財団法人アイヌ民族博物館学芸員）

◆博物館クラブ　かんじきで歩こう
　3/11（土）10：00-11：30

＊参加はすべて無料です。事前にお電話でお申し込みください。



鉤銛(かぎもり)



協力機関・個人

オホーツクミュージアムえさし/標津町サーモン科学館/斜里町立知床博物館/東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設/常呂町教育委員会/紋別市立郷土博物館/山田　訓二氏